

## 早乙女清房博士を悼む



### 弔 辞

<sup>そのとめ</sup>早乙女清房先生はわが国天文学の先達として、その開拓と進展に大きな貢献をされました。

また日本天文学会の創立に参画され、永く評議員あるいは名誉会員として本会の発展に尽力されました。

先生の御逝去にあたり、ここに謹んで哀悼の意を表します。

昭和 39 年 8 月 5 日

日本天文学会理事長

一 柳 寿 一

### 早乙女先生を偲ぶ

宮 地 政 司\*

冬の寒い日であった。早乙女先生を最後にお訪ねしたときのことを思い出す。まだとても健康そのものでおられたときである。蔵書の一部を天文台にお譲りねがったお礼のため参上したのであった。ご長男のお住いのある屋敷内の別棟に、ご夫妻で静かなお暮しのご様子であった。こたつにいられていただいて、例のゆっくりした口調でいろいろなお話を伺ったのだった。米寿とは思われないお元気であった。そしていまはそのお姿に接する術もないのである。

大学の一年のとき最小二乗法の講義を聴いたのが先生との交渉の始めであった。間もなく先生は留学された。いまのように飛行機でいける時代には想像もできないことだが、当時は欧州へ 30 日も 40 日もかかったのである。それだけに留学することは大変な事件だった。その留学がきまり留学費が大学から出たとき、先生のご母堂がその金をそっくり大学へ寄附されたという噂をきいた。できないことだとも思ったし、先生はたいへんな金持だとも思った。そして天文学なんかやる以上は名利を度外視すべきであると覚悟はしていたが、金持でなくてはやれないものかと淋しい思いがしたことを思い起こす。

早乙女先生は昭和 3 年以来、平山信先生の後をついで東京天文台の台長を兼ねられた。そのころ天文台は三鷹の地に移転を終り諸設備も一通り完成していた。塔望遠鏡や 65 センチ大赤道儀も完成したばかりだった。以来 8 年間の天文台は早乙女先生の人柄のようなおらかな

平和な時代であった。華々しい研究の成果が期待されていた若い優秀な天文仲間が、続々病没した惜しい時代でもあった。研究奨励の意味で日本文による研究を集めた天文台報や本学会の天文要報が出版されたのも先生のお考えによったものであった。

早乙女先生は台長として週 1 回本郷から三鷹へ来られた。それ以外のときは自転車を踏んで武蔵境駅から 4km の道を往復された。そして夕方おそくまで研究室におられた。始終時計室で英国製のシンクロノーム振り子時計と取り組んでおられるのをよくみた。先生は太陽観測や日食観測など多方面の観測研究にたずさわられたが、時計の研究はとくにお好きで、自宅には趣味として蒐集された和時計などが沢山飾ってあった。ご長男を時雄と名付けられたほどである。

早乙女先生の集会でのスピーチは一流のものであった。空とぼけたようにとつとつと話されたが、ユーモアたっぷり寸鉄肝をえぐるものがあつた。それでいて、平素は一般に無口で、何かお伺いしても「ハー」といわれてから暫く考えて答えられるという慎重な方であつた。大器といった風格がある。

先生は煙草を全然手にされなかったが、酒の方はたしなまれたようである。だが酔うほど飲まれたのをみたことはない。いつのことだったか、天文台で談話会のあつたときだったかと思うのであるが、故平山清次先生と酒と煙草の優劣良否について論争が展開された。平山先生は瘦型長身で、煙草はお好きのようだったが酒は一切口にされなかった。肥満型の早乙女先生とは何にかにつ

\* 元東京天文台長

けて正反対であった。両先生の熱心なやり取りはなかなか興味深々というところであった。いまなら肺ガン騒ぎで早乙女先生の勝というところであろうが、そのときはいつ果てるか判らない論戦が続いた。若いわれわれは談話会とそちのけでききいったものである。酒もよし煙草もよしと悟ったのであった。

早乙女先生は、若いころからそうであったように、晩年になっても“時”については興味を持っておられ、お

会いする度にそんなことがよく話題に上った。たしかに誰もが興味をもつぐらい大発展を示したのであるが、先生にはとくに嬉しく感じられたのであろう。そしてときには示唆に富んだお話をぼつりと話されることがあった。ありがたいことだと思った。いつまでもまことによい先生であった。ここにその思い出の一端を記して、心からご冥福を祈る次第である。

## 早乙女先生を偲んで

藤田 良雄\*

ローソップ皆既日食観測 30 周年記念会を神田の学士会館で催す話を中野さんと相談し、その時の隊長であった早乙女先生に出席していただきたいと思い、私が先生のお宅まで伺ったのは5月の末頃か6月の初旬であったろうか。先生は最近はいくらか弱られたといえ、しっかりしておられ、若し身体の調子がよければ出席させてもらいますということで、私は非常に喜んで先生のお宅を辞した。7月4日という日がきまってから先生の奥様から出席しますというお電話があり、当日となった。当日は京都、金沢からも出席があり、早乙女先生を中心とした和やかな集いになった。先生は自らたって30年前の当時のことをいろいろ思い出しながら回旧的に話され一同深い感銘をうけた。

それから間もなく御逝去の知らせをうけ、私は呆然としたのであった。私の早乙女先生に対する追憶は限りなく深い。昭和6年大学を卒業して直ちに就職した東京天文台で、当時は勿論今のように部制がしかれていなかったが、私の仕事は実験室における基礎的な実験と共にもう一つの大きな仕事は早乙女先生の下で当時すでに購入されていた塔望遠鏡の装置を組み立てることであった。16メートルの塔の上にシーロスタットを設置し、また地下室に大きいガラス分光器やグレーティング分光器をおいて太陽の分光観測ができるようにすることであった。先生は黙々として塔にはいって来られ、進捗状況をじっと見ておられた。何ヶ月かの後ようやく使えるようになった時私は先生のいつもと変らない温容に安堵の色があるのを見逃さなかった。一方実験室の仕事は田中務先生の指導のもとに行っていたが、この部屋へも先生はよくはいつて来られ深い関心を示されその進捗状況についていつも注意しておられた。

先生の観測に対する真面目な態度は忘れがたいものがある。ことに観測装置に対する取り扱いの慎重丁寧な態度は私には測り知れない深い思い出を残した。私の学生

時代に麻布の教室の先生の部屋におかれていたファブリービュイソンの実視測微光度計をどんなに先生が大事にしておられたかを思い出すと心が痛くなるような思いである。観測装置をあれ程大事にしておれば観測もよい成績をあげることができよう、その頃から私は思いを深くした。

それから昭和9年、前に述べたように南洋ローソップ群島に皆既日食があった時、日本としては初めての大きかりな日食観測隊が編成され、天文以外の地磁気、電離層の人たちも加わった。その時の隊長として先生は参加された。言葉数は少ないが、いつもおかし難い威圧感があった。威圧感といっても慈愛に満ちたものである。服装、態度はいつも崩れることがなかった。終始そばにいて私たちはますます先生の学究的態度に心を打たれた。

先生は旅行されるのがお好きであった。終戦後まもなくだったと思うが、郷里にいた私の父から早乙女先生がひょっこり家に訪ねて来られ全くびっくりしたという手紙を受けとったことがある。非常に厳格ないわゆる典型的な英国型紳士ともいべき先生ではあったが、また自らユーモラスな点も持っておられた。デパートでひょっこりお目にかかってあわてたのは私だけではなかったと思う。

一昨年先生の米寿を記念して何か差し上げたいと先生に申し出た時先生はなかなか承知されなかった。しかし私たちのたつての願いにとうとう先生もまけてそれではといて懐中時計を所望された。先生が時計に対し造詣が深く、めずらしいコレクションをお持ちだったが戦災で失われたときいたが、どんなに残念に思われたことだろうと思う。

いつも黙々として、しかし慈愛に満ちたまなざしをもって私たちをみつめていて下さったことを考えると、89才という天寿を全うされたとはいえ、いつまでも日本の天文学会をじっとみていただきたかったと深く考える。

\* 東大理